分野別研究組織成果報告（2021 年度）

ミュージアムにおけるフランス語教育活動の研究

French Language Educational Activities in Museums

今中　舞衣子（Imanaka Maiko）

近年、ミュージアムの役割のひとつとしての教育普及活動はますます活発化、多様化し、学校教育のプログラムに組み込まれた活動として実施されるケースも増えてきた。その理由は、効果として期待できる言語能力、コミュニケーション能力、分析力、批判的思考力の向上といった側面が、21 世紀型スキルに代表されるような新しい学習観・教育観に合致しているからだといえる。また、ミュージアムにおける教育活動は、習得したい言語を用いて他の教科やテーマについて学ぶ CLIL の実践事例としても取り上げられている。さらに近年では、文部科学省が提唱する STEAM 教育の一環として、学校が博物館などと連携・協力して教育を実施することが一例に挙げられている。

以上のような背景から、本研究は筆者が専門とするフランス語教育をテーマとして、フランス語圏のミュージアムにおける言語教育活動の事例を収集・分析し、日本の高等教育機関におけるフランス語教育への応用可能性を考察することを目的としている。具体的には、フランス語圏の美術館・博物館で制作・オンライン公開されているフランス語教材を対象とした分析を行った。

下記に挙げた発表論文では特に、パリにあるカルナヴァレ美術館におけるフランス語学習教材に焦点を当て、①どのような素材を用いて学習を促進しているか、②学習者に対する指示文がどのような言語的特徴を持っているか、③学習活動の実施にあたってどのような社会文化的知識が埋め込まれているか、について分析した。その結果、①地図、路線図、館内や展示物の写真、ピクトグラム、イラストを用いることにより、どのような活動をするかが視覚的に理解しやすくなる工夫がされていること、②初学習者でも回答可能な選択式問題や学習者の自己表現を促す二人称型の問題が提示されていること、③パリの地理や交通、ミュージアムの展示物に関わる文化的・歴史的な情報、フランスのミュージアムでの社会的なルールに関する知識が、フランス語の学習活動に取り組む過程の中に埋め込まれていることが明らかとなった。

今後の展望として、フランス語圏の他のミュージアムにおける事例も分析しフランス語学習のための教材制作の実践知を蓄積するとともに、館内の展示デザインやワークショップのデザインについても、言語教育活動の観点から分析・考察したいと考えている。

【発表論文】

今中舞衣子（2023）「ミュージアムでフランス語を学ぶことを目的とした教材の分析：カルナヴァレ博物館を事例として」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』49、pp.23-36.